

## 日蓮聖人と神道

國家の安危は政道の直否に在り、佛法の正邪は經文の明鏡に依る。夫れ此國は神國なり。神は非禮を稟け給はず

文永五年（1268年）は、蒙古使節の来朝の年である。同年十月十一日、右は、日蓮聖人が執権北条時宗に献した文書にある言葉である。

「直」とは荀子に「是を是と謂い、非を非と謂うを、直と謂う」とある。

「是非」の語源でもあるが、善悪の判断がひっくり返っているような政治状態は国家存亡の危機を招くというものである。更に、「神様は、礼儀あるいは道理に外れたことを願って祭っても、それを受け入れない」と日蓮聖人は指摘している。文永元年（1260年）七月に、有名な「立正安国論」を著わし、持論を鎌倉幕府に提出した後の事である。

承久の乱を経た当時の鎌倉時代は、今日と似たような天変地異や疫病が流行し、更に元帝国の圧力を受けていたのである。しかも立正安国論で非難をされたと思つた浄土教の信者は、同年八月二十七日に鎌倉の名越に草庵を結んでいた日蓮聖人に、夜、焼き討ちを加えた（松葉ヶ谷の法難）。しかし、直前に白猿が現れ、誦経中の日蓮聖人の袖を引き、山中に導いたと言われており、ここでも奇跡が臨んでいる。

因みに、神習教開祖の大中臣正兼も決死の修行中、白猿に救われている。真の求道者に神仏の奇跡は臨むものとしても、「白猿」の共通性は不思議である。前述の立正安国論は、高弟である日朗上人が建てた安国論窟寺の岩穴で書かれた。現在の安国論寺（妙法華経山）である。そこには、

日朗上人の遺言によってこの地で荼毘に付された日朗「御荼毘所」がある。

諸氏もご存知の通り、日蓮聖人は法華経を至上とする日蓮宗の開祖である。その仏門の高僧が何故、我が国は神国であると言ったのか。それは、日蓮聖人が神と釈尊の関係、更には天上界の歴史を知っていたからである。

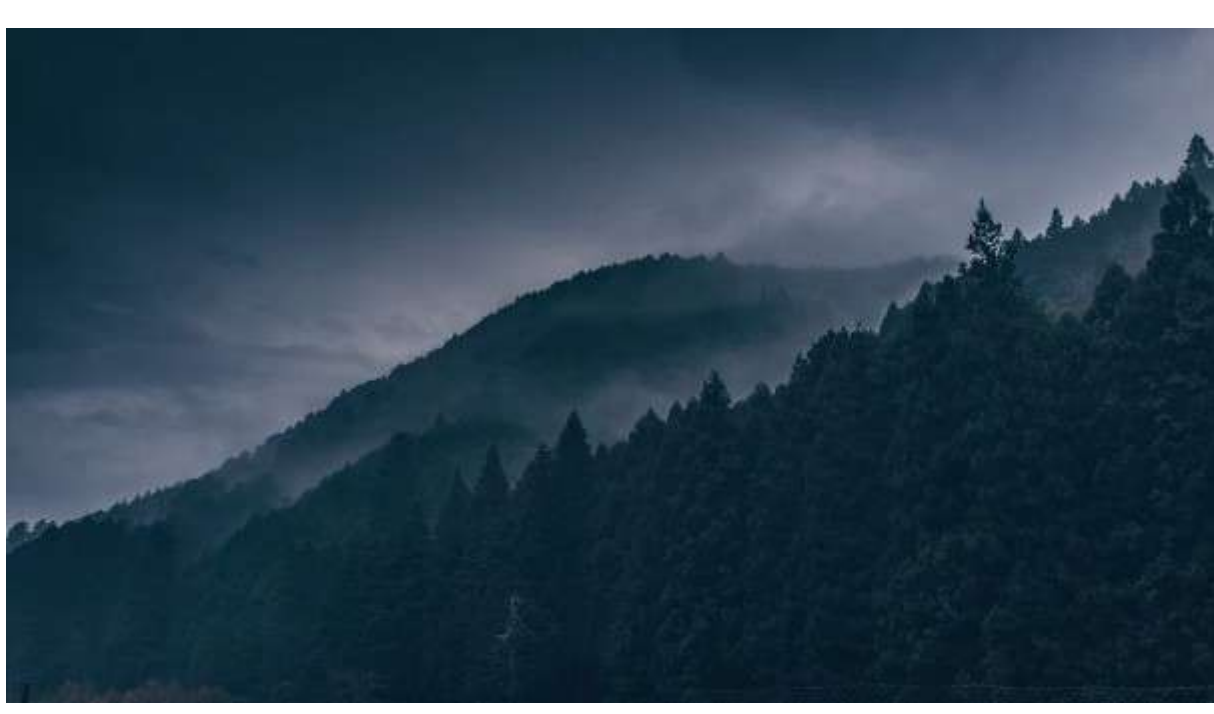
日蓮聖人は鎌倉幕府の迫害を受け、斬首の刑を受ける為に鎌倉を出発したのであるが、その道中のエピソードがある。日蓮聖人は、囲まれていた護送の武士を横に、八幡神社の前で突然に下馬する。そして神殿に向かつて、こう叫んだのだ（以下筆者意訳）。

「釈尊が法華経を説かれた時、仏弟子は無論のこと、諸天（仏法を守護する神々）は天上界から集い、釈尊に法華経護持を誓ったではないか。

我は一点の曇りもない法華経行者である。而して今、この状況に釈尊との誓いを実行しないのは何故であるか」と。斬首されようとする者の有り様としては尋常では無い、堂々たる自信である。この後、「竜ノ口の法難」で奇跡が起る。竜ノ口は、藤沢市片瀬にある刑場であり、帰順朝貢を迫る数次に渡る元帝国の使者を斬った所である。

日蓮聖人が竜ノ口で、まさに斬首されようとした時、江ノ島（海側）方面から謎の物体が飛来し、それから発せられた光線により、首斬り役人の身体は動けず、刀も折れて、皆、畏れおののき刑の執行は中止となった。

日蓮聖人の強力な思念をキャッチした、今で言うUFOを操る宇宙存在が介入した訳である。日蓮聖人は太古の歴史として、宇宙存在を知っていたと筆者は思う。その証左が、竹内文書として名高い竹内家に残っている。竹内家と日蓮聖人の交流の記録（次掲）である。



我家に寛元五丁未年（1247年）、秋八月に日蓮来たり、越中國 婦見郡 宮川郷 公郷村 赤池神明 高祖天照日皇太神宮 並に竹内家の神代太古代より傳來系圖を見る際、八月二十一日より赤池白龍明神堂に二十一日の行願をす。

九月十三日、日蓮自身、嗚呼、有難く妙法蓮華経 是、高祖天照日皇大神宮を大日天王と書く申。赤池白龍明神を赤池白龍大王と書く。夜陰月大神宮を月天王と書く。日向津姫尊を天照皇大神と書く。竹内源 基義殿に捧

其時に日蓮聖人に皇祖天照日皇太神宮の神託 顯り。

必ず皇祖皇太神宮、大日天王、月天王、白龍大王、妙法蓮華経と唱ふべし。

何人なり共、必ず信心すべし。災難諸病難を消滅する子孫わ、必ず富貴七福即生 妙不思議の徳利有と神託なり。以下略す

建長三年（1251年）八月十一日 來宮 参拜  
文永五年（1268年）三月庚酉日 同 参拜

正安二庚子年（1300年）九月十六日 印之  
正五位神主 並に中院少将 定諸殿の代官

竹内武蔵守 修理権太史 源惟光 書印

【出典 人類の祖国 太古日本史（岩田大中著 八幡書店）】  
竹内文書は、神武天皇から始まる神倭朝に先立つもので（古い順から）天神朝七代、上古朝二十五代、不合朝七十三代の神統を記す、太古の歴史書である。宇宙開闢からの人類の歴史であり、宗教者の日蓮聖人がそれらを読まなかった筈がない。日蓮聖人の思想のバックボーンとなったと筆者は思う。

令和三年八月九日 大中臣正比呂

